

Rennelin の解剖書とその訳書

レニリン

酒 井 シ ヅ

Johann Rennelin (一五八三—一六三二) の解剖書を本木庄太夫が訳したことおよびその訳書の考察はすでに報告した¹⁾²⁾³⁾が、今回は J. Rennelin の著書について主に考察を行い、同時に現存する訳書の形態について述べる。

J. Rennelin の解剖書は紙片を重ね、その紙を一枚一枚めくことで、からだの深部が現われてくる仕組みになった解剖書であるが、このやり方は十六世紀当初から解剖図の一部に採用することはあったが、解剖書全部がそれになるというのはレメリンのものが最初である。

著者レメリンは一五八三年にドイツのウルムに生まれ、一六三二年にアウスブルグで亡くなった医師であるが、著書は『小宇宙鑑』と題するこの解剖書だけが残る。

初版は一六一三年に出されたが、タイトル頁もなく、著

者の名前の頭文字だけが記される。このときの題は“Catalogum microcosmicum”であった。

二版は一六一九年に出版されたが、それにはじめてタイトル頁と解説頁がつく。

オランダ語版は一六六七年、レメリンの歿後に出版されたものであるが、タイトルは“Prax microcosmographica”となり、内臓の紙片が前二者と異なる。

レメリンの解剖書は西洋医学史においても異例な挿図の本であるが、その特異な点を示すとともに、なぜ、この本が選ばれて日本に入ったのか、また、翻訳後、どのように評価されたか、現存する写本を比較検討した結果を報告する。

- (1) 酒井シヅ「解体新書以前に翻訳出版された西洋解剖書」日本文学史雑誌 20巻3号 一九七四
- (2) 小川鼎三・酒井シヅ「本木庄太夫の医学」日本医学雑誌 21巻2号 一九七五
- (3) 小川鼎三・酒井シヅ「解体新書」出版以前の西洋医学の受容」日本学士院紀要 35巻3号 一九七八

(順天堂大学医学史研究室)